

2022 年度 新収蔵作品展 *Present for You*

わたしからあなたへ

みんなから未来へ

2022.12.22- 2023.2.19

町田市立国際版画美術館 企画展示室 2

1987 年 4 月の開館以来、町田市立国際版画美術館は版画を中心とするユニークな美術館として、国内外のすぐれた版画作品と資料を収集・保存し、版画をテーマとする展覧会を開催してきました。また、初心者から経験者まで幅広い層を対象とした実技講座や、各種の版画制作用具を備えた工房とアトリエを一般に開放し、「見る楽しみ」と「作る楽しみ」を総合的に紹介しています。

こうした当館の活動を支えるコレクションは、「古今東西の版画の歴史が多面的・総合的に理解できること」を目指し、継続的な調査・研究活動のもとに形成されてきました。その活動を評価していただき、近年は寄贈作品の点数も増加しています。本展では 2021 年度から 2022 年度にかけて新たに収蔵された 216 点のなかから、約 100 点の作品と資料をご紹介します。

「新収蔵作品展 *Present for You* ーわたしからあなたへ／みんなから未来へー」とは、当館に収蔵される作品が、人から人へと伝えられてきた貴重な文化遺産であるとともに、市民ひとりひとりから未来へのプレゼントでもあるという気持ちをこめたタイトルです。当館では今後も継続して収集・展示活動につとめ、コレクションを



大切に守り伝えていきたいと考えています。

最後になりましたが、貴重な作品や資料をご寄贈くださいました皆様、収集活動にご協力くださいました皆様に厚く御礼申し上げます。

2022 年 12 月 町田市立国際版画美術館

◇出品リスト

* サイズは mm(イメージ)

1～3

石井佛心 (1795-1863)

ISHII Buss shin

石井佛心は江戸に生まれ、大津絵師佛心と号して大津絵風の作品を制作した人物です。深川富岡八幡宮の境内で茶屋伊勢屋を営んでいましたが、天保の改革後に廃業。境内にあったもう一つの茶屋松本の主人・松本交山 (1784-1866、谷文晁門人) に画技を学び、のちに大津で古法を研究し江戸の大津絵師として一家を成したと伝えられます。

大津絵は江戸時代に東海道沿いの大津宿（現在の滋賀県大津市）周辺で売られた土産物です。佛心は《瓢箪鯰》や《雷と太鼓》など、大津絵の代表的な画題を描きました。

佛心の没後は、養子となった日本画家・版画家の石井鼎湖（鈴木鷺湖の次男）が石井家を継いでいます。鼎湖の次男は版画家・洋画家の石井柏亭、三男は彫刻家・洋画家の石井鶴三で、本作の旧蔵者・田河水泡は一時期鶴三と同じ田端に住んでいました。

1

瓢箪鯰

江戸後期 283×196 紙本着色、一幅

2

雷と太鼓

江戸後期 293×199 紙本着色、一幅

3

『大津絵画帖』

江戸後期 299×203×7 紙本着色、一帖

4

岸田劉生（1891-1929）

KISHIDA Ryusei

鷹匠

大正～昭和初期 674×219 紙本着色、一幅

1～4 高見澤邦郎氏より寄贈

岸田劉生は大正から昭和初期に活躍した洋画家。本図は、江戸時代に大津宿で売られた大津絵の画題「鷹匠」を描いたものです。羽織に裁附袴を履いて脚絆と白足袋

を付けやや振り向くポーズは「鷹匠」の典型図像ですが、通常とは異なり塗り笠をかぶっているため、「藤娘」など別の図像も参考にしたのかもしれませんが。

劉生は著作『初期肉筆浮世絵』（岩波書店、1926 年）のなかで、大津絵について「個性芸術ではなく、民族芸術としてみるべきもので、その点これだけの味のあるものは一寸世界的に稀であらう。愛すべきものと思ふ」と記しました。明治期以降、大津絵は数々の画家や文化人らにより熱心に収集、評価されるようになり、本作もそうした動きのなかで描かれたと考えられます。本作には木村莊八による箱書きが付属します。

作品 1～3 とともに漫画家・田河水泡の旧蔵品です。

5

川瀬巴水（1883-1957）

KAWASE Hasui

霧之朝（四谷見附）

1932（昭和 7） 364×240 木版

三橋富士枝氏より寄贈

川瀬巴水は大正期から昭和期にかけて活動した「新版画」の版画家です。新版画とは浮世絵商で海外輸出用の伝統木版の版元でもあった渡邊庄三郎が大正初期に始めた、浮世絵版画を継承しつつも新しい時代の芸術作品としての木版画の普及を目指して制作出版された近代版画です。巴水は 1918 年より新版画の制作を開始し、生涯に 600 点を超える作品を制作しました。創作テーマは風景で、日本全国を旅行して目にとまった風景をスケッチし、東京に戻っては版画を制作するという活動を展開しまし

た。

出品作品は新版画の版元であった土井版画店から出版されたもので、昭和初期の四谷見附の風景を描いた木版画です。前景に大きな松の木を配置し、背景には霧におおわれた朝の街並みがグラデーションとシルエットで表わされています。

6

前川千帆（1888-1960）

MAEKAWA Senpan

『閑中閑本』より

各 167×92 木版（冊子）

17	第十八冊	伏見土偶帖	1957（昭和 32）
18	第十九冊	山野雑草帖	1957（昭和 32）
19	第二十冊	街頭雑音帖	1957（昭和 32）
20	第二十一冊	張子だるま帖	1958（昭和 33）
21	第二十二冊	蝦夷風物帖	1958（昭和 33）
22	第二十三冊	富士景觀帖	1959（昭和 34）
23	第二十四冊	抒情季節帖	1959（昭和 34）
24	第二十五冊	山海口福帖	1960（昭和 35）
25	第二十六冊	野外小品帖	1960（昭和 35）
26	第二十七冊	閑本工程帖	1960（昭和 35）

佐藤保正氏より寄贈

1	第一冊	文献愚糖帖	1945（昭和 20）
2	第三冊	記録紙漉帖	1947（昭和 22）
3	第四冊	北越雪見帖	1948（昭和 23）
4	第五冊	童子嬉遊帖	1949（昭和 24）
5	第六冊	浴泉余情帖	1949（昭和 24）
6	第七冊	山の城風物帖	1950（昭和 25）
7	第八冊	東西島々帖	1950（昭和 25）
8	第九冊	風物千代紙帖	1951（昭和 26）
9	第十冊	山菜饗宴帖	1951（昭和 26）
10	第十一冊	神籤吉凶帖	1952（昭和 27）
11	第十二冊	東西遊行帖	1953（昭和 28）
12	第十三冊	単語濁音帖	1954（昭和 29）
13	第十四冊	第二浴泉余情帖	1954（昭和 29）
14	第十五冊	花月明暗帖	1955（昭和 30）
15	第十六冊	鳴子こけし帖	1955（昭和 30）
16	第十七冊	爐辺漫談帖	1956（昭和 31）

前川千帆は明治末期から昭和期にかけて活動した版画家、漫画家です。京都出身で、関西美術院において浅井忠や鹿子木孟郎に学んだ後、1911 年に上京、その頃木版画の制作を始めました。1922 年には日本創作版画協会の会員となって作品を発表し、1931 年の日本版画協会結成に際しては常任委員のひとりに名を連ねました。その一方で、昭和初期には『読売サンデー漫画』に「あわてものの熊さん」を連載、大ヒットして人気の漫画家としても活躍しました。

出品作品の『閑中閑本』は、千帆が 1945 年に疎開した岡山県久米郡で「忙中閑」ならぬ「閑中閑」に着手した木版挿絵本です。岡山居住中、そして帰京後もライフワークとして継続して制作出版し、生前に第 26 冊まで刊行され、没後に未完の第 27 冊目が刊行されています。

平塚運一（1895-1997）

HIRATSUKA Un-ichi

平塚運一は島根県松江市生まれの創作版画家です。大正期末に平安や鎌倉時代の仏教版画の魅力を発見し、その素朴さや力強さに影響されながら自身のスタイルを築きました。国画会と日本版画協会を主なる舞台として発表しましたが、版画の技法書を著して版画普及にも大きな功績を残しました。1962年にアメリカに渡って制作し、1994年帰国、郷里の松江で制作しています。

出品作品は、いずれも白と黒が絶妙なバランスのうちに配され、コントラストのある力強い画面の作品で、1950年代以降の平塚版画の造形的特徴を示す作品といえます。

7

裸婦金剛經

1950（昭和 25） 320×234 木版

8

浄瑠璃寺の塔

1960（昭和 35） 438×284 木版

9

浜口陽三（1909-2000）

HAMAGUCHI Yozo

くるみ

1959（昭和 34） 541×232 メゾチント

浜口陽三は和歌山県生まれの銅版画家です。1930年に東京美術学校退学後にフランスに渡って活動し、その後戦中に帰国しましたが、1953年に再度渡仏、その後1970年代以降はアメリカでも活動しました。赤・青・黄の三

原色と黒を刷り重ねたカラー・メゾチントの版画制作で

知られていますが、本展展示の版画はモノクロームのメゾチント作品で、パリ時代に制作したものになります。

1959年に東京都美術館で開催の「第5回日本国際美術展」出品作品でもあります。心象風景を表現しつつけた浜口らしい、繊細で抒情的な表現が認められる作品といえます。

10

瑛九（1911-1960）

EI-Q

スケート

1956（昭和 31） 436×285 リトグラフ

瑛九は1930年代から1960年にかけて活動した宮崎県生まれの前衛芸術家です。本名、杉田秀夫。1930年代から創作活動を始め、フォトグラム（カメラを用いず、印画紙の上に物を置いて直接感光させるなどの方法で制作された写真作品）、油彩画、版画などを制作しました。1951年には若手美術家らと前衛美術家集団「デモクラート美術家協会」を結成し、そのリーダーとして活動しています。版画制作にも積極的で、1950年代に銅版画、リトグラフを多数制作しています。そのうち、リトグラフについては1956年から57年にかけて集中して制作しました。出品作品は、スケートをしている様子が抽象と具象の中間の様式で制作された、瑛九らしい表現が見られるリトグラフです。

7～10 個人より寄贈

畦地梅太郎（1902-1999）

AZECHI Umetaro

石鎚山

1985（昭和 60） 395×798 木版

個人より寄贈

畦地梅太郎は、愛媛県出身の木版画家。印刷工時代に鉛板を用いた版画を試作、それを見た平塚運一のすすめで版画にとりくみ、創作版画運動最後の世代として、戦前戦後を通じて制作を続けました。1950 年代に始まる「山男シリーズ」で知られ、山岳風景の作品とともに「山の版画家」として現在も広く親しまれています。晩年を町田市鶴川で過ごし、町田市名誉市民となっています。

四国山地西部にそびえる石鎚山は西日本の最高峰で、この故郷の山を畦地は何度も描いています。出品作は松山市にある愛媛県民文化会館ホールの緞帳原画として制作された木版画。当時 83 歳の畦地は愛媛を訪ね、石鎚山が最も魅力的に見え则认为ていた瓶が森山でスケッチを行いました。畦地作品の中でもとりわけサイズの大きなこの作品は、その最後の木版画とされています。

12～16

草間彌生（1929 生まれ）

KUSAMA Yayoi

草間彌生は長野県生まれ。幼少時から強迫神経症に悩まされ、自らを癒す行為として創作をはじめました。1957 年には家族の反対を振り切って単身渡米し、翌年からはニューヨークで活動します。「無限の網」をテーマにした

ペインティングや、布製の突起物で家具などを覆う「ソフト・スカルプチュア」の創始者として高い評価を受け、1960 年代のインスタレーションやパフォーマンスの先駆的な分野で活躍しました。

帰国後の 1970 年代後半から小説やコラージュなど新たな表現に取り組むなかで、版画も手がけていきます。1979 年から版画を作り始めた草間は、刷り師とのコラボレーションでスクリーンプリントに取り組んでいきました。

出品作品に描かれるかぼちゃは代表的なモチーフで、草間の生家が種苗業を営んでいたことから好んで描かれています。

12

魚

1988（昭和 63） 533×608 スクリーンプリント

13

こんにちは

1989（平成元） 535×610 スクリーンプリント

14

レモンスカッシュ(3)

1992（平成 4） 282×375 スクリーンプリント

15

かぼちゃ（R）

1992（平成 4） 282×375 スクリーンプリント

16

かぼちゃ（BY）

1999（平成 11） 700×590 スクリーンプリント

17～19

和田誠（1936-2019）

WADA Makoto

和田誠は、大阪府出身のグラフィック・デザイナー、イラストレーターです。多摩美術大学を卒業後、広告制作会社ライトパブリシティに入社し、1968年に独立。『週刊文春』の表紙をはじめ、200冊以上の本のイラストや装丁を手がけ、エッセイスト、映画監督、作詞家としても活躍しました。

和田は、1990年代に銅版画家・山本容子（1952生まれ）からエッチングを学び、本格的な銅版画制作を開始しました。愛猫を題材にした作品18は、和田が銅版画に取り組むきっかけとなった作品です。作品19は、山本との二人展「二人のシネマ」のために制作されたシリーズで、和田にとって思い出の深い映画が表されています。

和田誠事務所より寄贈

17

『マザー・グース』より

1992（平成4） 各 370×285 エッチング

- 1 ハンプティ・ダンプティ
- 2 セント・ダンスタン
- 3 コウモリ
- 4 玉子売り
- 5 ディケイ
- 6 バーバー
- 7 雄鹿

18

ねこのシジミ

1996（平成8） 150×215 エッチング

19

『二人のシネマ』より

1998（平成10） エッチング

- | | | |
|---|--------------|---------|
| 1 | オルフェ | 300×250 |
| 2 | 道 | 300×250 |
| 3 | ハリウッド1 | 300×250 |
| 4 | フレッド＆ジンジャー | 300×250 |
| 5 | カリガリ博士 | 225×225 |
| 6 | チャーリー・チャップリン | 225×225 |
| 7 | カミング・スーン | 225×225 |
| 8 | メトロポリス | 225×225 |

20～29

黒崎彰（1937-2019）

KUROSAKI Akira

黒崎彰は旧満州大連生まれ。京都をベースに国際的に活躍した木版画家。油絵を芦屋の新制作洋画研究所で、デザインを京都工芸繊維大学で学ぶうちに、「バタ臭いものばかり教える」教育に違和感を覚え、暗中模索するなかで幕末浮世絵に出会います。職人を訪ね伝統木版の技法を習得すると、独特の色彩による多色刷り木版画で高く評価され、国内外で受賞をかさねました。文化庁芸術

家在外研修員として欧米に滞在、その後も海外で活動する機会が多く、国際展や国際会議に深く関わり、日本版画の国際交流に尽力しました。版画史研究者としても知られ、教育者としては京都精華大学で多くの後進を育てました。伝統木版の高い技術と、版画についての幅広い知識を活かし、海外で出会った新しいテーマや手法を積極的に取り入れ木版画表現の可能性に挑み続けました。

20
東京百景 王子紙の博物館

1992（平成 4） 570×390 木版 8 版 17 色、越前奉書紙

1980 年に初めて訪れた韓国で、黒崎は日本とは違う、素朴で強靱な紙に出会いました。紙という素材そのものに魅力を感じ、自らの手で漉いた紙でペーパーワークを展開、1984～90 年はこれが制作の中心になりました。

今回展示しているのは 1992 年以降の版画作品です。《王子紙の博物館》には浮世絵の影響を感じさせるかつての表現がみられますが、韓国楮紙を用いた作品では、紙の素材を活かした新たな表現に挑んでいます。ギリシア神話に取材した『ガイア』シリーズ、ブルガリアの遊牧民に想を得た『遊牧の民』シリーズなど、主題も異文化を理解しようとする姿勢に基づくものです。

21
三本の稲妻

1993（平成 5） 900×600 木版 3 版 3 色、韓国楮紙

22

黒い髪

1993（平成 5） 600×900 木版 4 版 4 色、韓国楮紙

23
モノリス C-仮面

1994（平成 6） 570×390 木版 6 版 9 色、韓国楮紙

24
＜ガイア＞シリーズ はこぶね

1995（平成 7） 900×600 木版 5 版 7 色、韓国楮紙

25
＜ガイア＞シリーズ 大食の王

1995（平成 7） 900×600 木版 5 版 8 色、韓国楮紙

26
ハーデスの帽子

1999（平成 11） 600×400 木版 4 版 5 色、韓国楮紙

27
＜遊牧の民＞シリーズ 族長

2002（平成 14） 895×592 木版 6 版 6 色、韓国楮紙

28
『近江八景』
木版、韓国楮紙

- | | | | |
|---|-------|-------------|---------|
| 1 | 堅田の落雁 | 2010（平成 22） | 500×850 |
| 2 | 三井の晩鐘 | 2010（平成 22） | 850×500 |
| 3 | 矢橋の帰帆 | 2010（平成 22） | 500×850 |
| 4 | 比良の暮雪 | 2010（平成 22） | 500×850 |
| 5 | 石山の秋月 | 2010（平成 22） | 850×500 |
| 6 | 栗津の晴嵐 | 2011（平成 23） | 850×500 |

7 唐崎の夜雨 2011（平成 23） 500×850

8 瀬田の夕照 2011（平成 23） 850×500

神戸で育った黒崎は、小学生の時に戦火を避け、父方の故郷・近江に疎開しました。その後、高校時代の一時期も過ごした自然豊かな近江の地は、黒崎の心のふるさととなりました。

近江八景は、琵琶湖周辺の 8 か所の名勝で、中国・洞庭湖の瀟湘八景になぞらえて選ばれました。文芸や美術で広く取り上げられてきた伝統的なこの主題について、黒崎は「季節や天候、物象と時間、日々の生活と自然を巧みに織り込んだ」ものと語っています。雪月花の季節表現、浮御堂や唐橋といった要素をきちんとおさえつつ、大胆な意匠により現代的かつ個性的な近江八景を創り出しました。制作にあたっては現地でスケッチを行い、『矢橋の帰帆』ではいったん完成させた後に、船の形のわずかな間違いを正確に作り直したといます。

29

『万葉シリーズ』

2014（平成 26）木版、八女紙

1 近江 ムラサキの蒲生野／額田王 400×550

2 近江 夕波千鳥／柿本人麻呂 400×550

3 近江 伊香の萩原／笠金村 400×550

4 近江 逢坂山／詠人不詳 550×400

5 近江 比良の湊／高市黒人 550×400

6 大和 雪の佐保／光明皇后 400×550

7 大和 阿騎野の朝／柿本人麻呂 400×550

8 大和 天の香具山／持統天皇 400×550

9 大和 わらびの春／志貴皇子 550×400

10 大和 磐余の池と鴨／大津皇子 550×400

20～29 モニカ・ベージェ氏より寄贈

『近江八景』の制作によって、文学とイメージのコラボレーションに興味をもった黒崎が次に選んだテーマが万葉集です。海外文化を理解し、世界共通の視覚イメージとして表現してきた黒崎は、言語をテーマにすることで日本人としてのアイデンティティを見つめ直しました。

万葉集の 4,500 首あまりの歌を読み込み、研究書などを参考に、そのなかから「心にふっと情景が湧き上がった」10 首を選びました。薄手で絵具ののりの良い八女紙を用い、柔らかく繊細な表現で歌の世界を描いています。近江、大和に続いて、和歌山、難波の準備を進めていたといます。

30

相笠昌義（1939 生まれ）

AIGASA Masayoshi

都会人のためのモニュマン 67-I

1967（昭和 42） 322×276 エッチング

紅梅茂樹氏・穰氏より寄贈

相笠昌義は東京都出身。東京藝術大学油絵学科卒業後しばらくはコラージュと版画を制作の中心としていまし

たが、1970 年頃から油彩制作を再開、駅や交差点などを舞台に、都市を行き交う人々の姿を鋭い観察眼と優れたデッサン力で描き出す「日常生活」のシリーズで知られます。芸術選奨文部大臣新人賞、安井賞受賞、元多摩美術大学教授。銅版画を中心に版画制作も続け、2004 年に当館で個展を開催しています。

出品作品は初期の『文明嫌悪症』シリーズの 1 点。頭の中に浮かんだ奇妙なイメージをコラージュすることで、混沌とした都会生活を表現しています。当初は偶然性を利用したデカルコマニーのようなフォルムを用いていましたが、やがて写真製版によるメカニックな部分に手描きを加えたシャープな表現にかわります。本作はその変わり目に位置する作品です。

31～41

吉岡弘昭（1942 生まれ）

YOSHIOKA Hiroaki

吉岡弘昭は、愛知県名古屋市生まれ。高校卒業後、独学で油彩画をはじめ、早くに二科展や毎日現代日本美術展で評価を得ると、1969 年より銅版画（ドライポイント）の制作を始めました。以降、銅版画やリトグラフ、木版画等を手掛け、全国各地の美術館、ギャラリーにて展覧会を開催。1989 年にはリュブリアナ国際版画ビエンナーレ展に、1990 年にはソウル国際版画ビエンナーレ展に招待出品されるなど、各地で作品を発表しています。

金属から受ける抵抗感を好みドライポイントに取り組んだという吉岡は、初期作品では『変身』シリーズ（作品 31）や『鳥女幻想』シリーズ（作品 35）など、どこか

諧謔味のあるモノクローム作品を手掛けました。徐々に『GON & BEN（YELLOW）』（作品 36）など鮮やかな色彩があらわれ、犬や人間をモチーフとしたユニークな世界観がつくられるようになります。

31

変身シリーズ No.1

1969（昭和 44） 360×330 ドライポイント

32

崩れる人（A）

1970（昭和 45） 400×360 ドライポイント

33

電柱のある風景

1972（昭和 47） 400×360 ドライポイント

34

赤い月

1972（昭和 47） 400×365 ドライポイント、メゾチント

35

鳥女幻想 J

1974（昭和 49） 360×330

ドライポイント、メゾチント、ビュラン

36

GON & BEN（YELLOW）

1976（昭和 51） 365×500 ドライポイント、ルーレット

37

愚者の船

1982（昭和 57） 400×500 ドライポイント、ルーレット

38

THE DOG (GRAY)

1986 (昭和 61) 450×600

ドライポイント、アクアチント

39

寓意のものたち・A

1994 (平成 6) 450×600

ドライポイント、アクアチント

40

十字形のある風景 (BLACK)

1994 (平成 6) 400×365 ドライポイント、凸版

41

赤い円形の顔

2002 (平成 14) 400×365

ドライポイント、アクアチント、カーボランダム

作家より寄贈

42

森光子 (1944 生まれ)

MORI Mitsuko

詩画集『天空の五指』

2016 (平成 28) 各 270×250 (紙)、約 150×150 (画)

スクリーンプリント

作家より寄贈

森光子は、フランス在住の美術家です。東京藝術大学油絵専攻を修了した 1970 年に、フランス政府給費留学生として渡仏。1971 年から 1975 年にかけてパリ国立美術学校で画家・版画家のジョルジュ・ダイエス (George

DAYEZ, 1907-1991) に師事。以後、パリを拠点に活動し、世界各地で作品を発表しています。2021 年にはノルマンディーのルヴィエ博物館にて、個展「Mitsouko MORI, Au-delà des sens」が開催されました。

森の作品は、直線や曲線によって構成された幾何学抽象を特徴とします。出品作でも、スクリーンプリントによる鮮やかな色面と図形の律動的な組み合わせが目をひきます。『天空の五指』は 12 点からなる詩画集で、全てにフランスの美術評論家・詩人のジル・プラジー (Gilles PLAZY、1942 生まれ) の詩が付されています (和訳：桑田光平 KUWADA Kohei、1974 生まれ)。

43

文月恵津子 (1955-2020)

FUZUKI Etsuko

『Phenomenon』

2010 (平成 22) 各 158×54 メゾチント

本田貴子氏より寄贈

文月恵津子は神奈川県横浜市出身。神奈川県立神奈川工業高校産業デザイン科グラフィックコース卒業。企業デザイン室での勤務をへて、フリーランスのイラストレーターとして広告・出版・TV で制作にあたりました。銅版画家の玉上恒夫に師事し、1992～94 年にはそのアシスタントを務めます。海外在住邦人向け雑誌に掲載された宮沢賢治作品の挿絵に銅版画を用い好評を得ました。2001 年の個展を皮切りに、国内外 (ドイツ、イギリス、アメリカ、メキシコ、スペイン、ハンガリーなど) で銅版画とインスタレーションの発表を続けていましたが、

2020 年逝去。2021～22 年に東京・香川・京都で追悼展が開催されました。

出品作品はメゾチントの連作。漆黒の闇に光のフォルムが芽生え、やがて画面は光に満ちた世界につながっていきます。誕生から死そして再生、苦悩から希望を感じさせる作品です。

44

ソニア・ドローネー（1885-1979）

DELAUNAY Sonia

赤い大プロペラ（風の神）

1970（昭和 45） 711×889 リトグラフ

ソニア・ドローネーは、ロシア帝国（現・ウクライナ）出身のアーティスト。主にパリで活動し、夫ロベール（1885-1941）とともに、キュビズムの影響を受けた芸術運動「オルフィスム」を展開。抽象絵画の誕生にも大きな役割を果たしました。テキスタイルなど独自の仕事でも評価され、女性アーティストとしては初めて、存命中にルーヴル美術館で回顧展が開催されました。

出品作品は、1953 年に制作した油彩画をもとにしたリトグラフ。画面を二分する対角線や半円形など、ロベールの作品と共通する要素を、より明るい色づかいで簡潔に表したデザイン性が目を惹きます。

45

ジャン・カルズー（1907-2000）

CARZOU Jean

グラン・パレ

1968（昭和 43） 335×265 エッチング、ドライポイント

ジャン・カルズーは、フランスで活躍した画家・装飾画家・版画家。シリアでアルメニア人の家庭に生まれ、建築を学ぶためパリに移りました。1939 年から作品を発表するようになり、国内外で高い評価を得ました。

出品作品は、パリ市議会から公式の注文を受けたカルズーが制作したもの。表されているのは、パリ中心部にあるグラン・パレをセーヌ河の左岸から捉えた眺めです。グラン・パレは、1900 年の万国博覧会のために作られたパヴィリオンで、現在は国立美術館として利用されています。製図を思わせる直線的な線刻は、建築を学んだカルズーならではの特徴です。

46

ベルトラン・ドルニー（1931-2015）

DORNY Bertrand

キャラキット

1969（昭和 44） 760×560

アクアチント、エンボス

ベルトラン・ドルニーは、パリ出身の版画家。1970 年代から国立美術学校で版画を指導し、ポンピドゥー・センター図書館、フランス国立図書館で個展を開くなど、フランス国内で活動しました。

出品作品は、エッチングとアクアチントを併用した多色刷りの銅版画です。キャラキットは、カナダ東部の街の名前で、ドルニーはこの他にも世界各地の都市名を付けた作品を残しています。黒、青、緑のはっきりとしたコントラストと、板を押し付けて刷ったエンボスの効果が、ダイナミックな画面を作り出しています。

町田市立国際版画美術館

2022 年 12 月 22 日発行

3,000 部作成、1 部あたりの単価 15 円（職員人件費を含みます）